

出張メイドサービス サンプル

メイド・裸エプロン・奉仕・乳首・カウパー・視姦・羞恥・飲尿・疑似飲尿・  
男体盛り・たま洗い・腸内確認・直腸カメラ・中出し・攻めのオナニー・特殊  
プレイ・包茎等

受け以外のメイドが……

ペニスをスポンジに見立てて食器を洗い、他のメイドの膀胱から出た水で洗  
い流したり、

ドクターフィッシュの水槽で恥垢を餌として与えていたり

男体盛りしていたり

性欲処理用として四つん這いになっている部屋があったり……いろいろな登場  
します。

受けの直腸で卵サラダを作ります。

がつつりハピエンです。

複数プレイはありません。

プレイが多すぎてタグの抽出しきれないかもしれません……すみません。  
ご注意ください。

「ミカ」

ハードな研修を終え、重い体を引きずるようにして荷物をまとめていたと  
きだった。呼び掛けに振り向くと、ロッカールームの入り口から支配人が入  
ってきた。

「ミカ、初仕事だ」

(えっ……)

「なんだ？」

「い、いえっ……」

この「出張メイドサービス」店に入店して一週間。まさか研修最終日の帰  
りに早速派遣の話をされるとは思ってもみなかった。

「え、ミカもう仕事入ったの？ すごいじゃん！」

隣で着替えをしていた先輩メイドが声を上げた。続けてその近くにいた先

輩たちも次々と口を開く。

「すげえな！ やっぱり顔可愛いもんなあ」

「誰なんですか？ 新規？」

まるで期待の新人のような扱い。でもそう言えるのは研修の様子を見ていないからだ。きっとここに研修担当教官がいたら苦笑していたことだろう。

「山城様だ」

支配人の言葉に、賑やかだったロッカールームが水を打ったように静まり返った。

「あの……？」

いったいどうしたのだろう。先輩たちの顔を見ても、誰一人目を合わせようとしてくれない。その様子に支配人も気付いているはずなのに、先輩たちの方を見ようもしない。

「明日、十七時だ。十六時には出勤しなさい」

「あ、はいっ」

支配人は一つ頷くだけで部屋を出て行ってしまった。

「あの……？」

ボタンとドアの閉まる音が聞こえた途端、先輩たちはようやく口を開いた。

「マジか……山城様……頑張れよ、ミカ」

「あちゃー。しよっぱな山城様とか……」

「支配人もよく受けたよなあ」

どうしたのだろう。でもどうやら、山城という客にいいイメージはないようだ。

「あの……どうしたんですか」

「あー……」

頭を掻きながらこちらを見たのは、最初に「すごいじゃん！」と言ってくれた先輩メイド、カオルだった。とても面倒見がよく、優しいうちのナンバーワン。けれど今、普段のにこやかな表情は消え去り、困ったように視線を揺らしていた。

「山城様はさ……うーん……暴力的ってことはないんだけど、厳しいっていうか……」

初出勤を不安にさせないためにカオルが言葉を選んでいうのに、後ろから他の先輩メイドが次々と言葉を発した。

「チップもくれないし部屋もぼろくて狭いし！」

「顔はかっこいいんだけどねえ……」

「ねえ、やっぱあれつてさ、僕たちを呼ぶために節約して生活してるのかな？」  
止まらない山城批判。どうやらみんな一度は山城の元に派遣されているらしい。

「そういえば山城様の名前聞くの久しぶりだよな」

「僕、二か月前に行きましたよ」

「ってことはやっぱ新人食い……っていうか新人しか残ってないってことなんだろうなあ」

言葉の意味が分からず尋ねると、みんな山城に派遣された後はNG登録をしているらしい。だからもう新人以外に呼ぶ相手がおらず、美門(みかど)の研修が終わるのを待ち構えていたのだろう——と、先輩全員の意見が一致した。「とりあえず、怪我をするようなことはないし」

「確かにそれはない」

「でも笑わないからねえ……」

「他のお客さんはみんなにこにこして『可愛いね』って言ってくれるのに……」

「分かる！ 可愛いね、えっちだねって言ってくれるから楽しくなってもっとサービスしちゃうんだよね」

「それを喜んでもらって、結果的に指名に繋がるんだよね！」

「そうそう！」

「……けど、山城様はなあ……」

「うん……」

会ったこともないというのに、頭の中には厳しい顔をした中年男性の顔が思い浮かんだ。顔はいいと言っている先輩はいたし誰もそれを否定しなかったけれど、笑わない、厳しい、みんながNGにしているという時点で恐怖心がむくむくと芽生える……を通り越して育ってしまう。

「……ま、まあ、大丈夫だって！ 別にとつて食われるわけじゃないし」

「そうだよ！ とりあえず一度行つて、ちよつと耐えて、それからはNGにしちやえばいいんだし」

「そうそう。もうどんな人かは分かってるんだから、そのつもりでいればいいよ」

明らかにフォローと分かる発言だった。もう不安しかない。怖い。でも無理ですなんて言えるはずもない。

まるで逃げるように「お疲れ様〜」と消えていく先輩たちの背中を見つめ、一人残ったロッカールームで溜息を吐いた。

「は、はじめましてっ！ み、ミカと申します！」

インターフォンを押すとすぐに開けられたドア。怖い人なら失礼をしてはまずいと思い、顔を見るより先に頭を下げた。そして頭上から聞こえる厳格な声。

「入りなさい」

「は、はいっ！」

深々と折っていた腰を戻すと、山城はすでにこちらに背を向けていた。

「失礼しますっ！」

靴を脱ぎ、揃えてから上がる。立ち上がると、大柄な山城はすでに廊下の先、開け放たれたリビングのソファに座っていた。

(もうっ?)

歩くのが速いのだろう。時間は有限だ、と無駄にしないタイプ。ぼうっとしていたり、不手際があったりすれば容赦なく怒られそうだ。

「こちらへ」

「はいっ！」

先輩たちは「狭い」「ぼろい」と言っていたけれど、とても広いリビングだった。しかし家具はほとんどなく、生活感はなし。清掃は行き届いているし、必要最低限の物しか置かない、潔癖で几帳面なタイプなのだろう。

(失敗しないようにしなきゃっ)

先輩たちは「終わればNGにすればいいから」なんて慰めてくれたけれど今日は初仕事。お給料をもらうのだから失敗しないのは大前提で、それ以上に満足してほしかった。

「エプロンはこれを」

「はい」

組まれた足はすらりと長い。ソファが低いのかなと思ったけれど、受け取るために近付くと、美門の膝の高さだと分かった。

でもそれより——先輩メイドが誰一人として顔を貶さなかった理由が分かった。日本人離れしたくつきりとした顔立ち。目は鋭いけれど、きれいな奥二重。鼻筋はすつと通り、体型も相まってまるでモデルのようなのだ。

(あ……モデルさんかな……?)

芸能関係には疎いので、知らないだけかもしれない。外見から考えてもモデルと言われれば納得だし、先輩たちは貶したけれど部屋も広い。もし本当に節約しているとしても、メイド派遣を頼めるほどのお金を持っているということだ。モデルの収入がいかにほかには分からないけれど、これほどきれいな顔と整ったスタイルなら納得だった。

「どうした」

「あっいえ! ……えつと……」

つい顔に見入ってしまった。じろじろ見るなんて失礼なのに、山城は見られ慣れているのか気にする様子はない。

それにしても、いったいどこで着替えたらいいのだろう。洗面所とかトイレとかを借りられないだろうか、と思って辺りを見回すと、意図に気付いたらしい山城が「ここで着替えなさい」と言った。冷たいとも聞こえるような声。でもそれより、目の前で着替えるということに羞恥を覚えた。

「はい……」

広げてみると、それは黒を基調にしたエプロンで、白いレースが縫い付け

られていた。よく「メイド」と聞いてすぐにイメージするようなものだ。しかし丈は短く、おそらく小柄なミカが着ても鼠蹊部を隠すかどうか、というところだろう。それに胸の辺りには左右に二つの小さな穴が開いている。(これってもしかして……)

「服を脱ぎなさい」

「は、はいっ」

やはり、裸で着るエプロンだ。丸い穴はおそらく乳首が露出するように開いているのだろう。いやらしいデザイン。これを先輩たちもみんな着たのだろうか。

ねっとりとした視線を浴びながら上衣を脱ぐ。一枚しか着ていなかったせいで、簡単に肌が露わになった。

「……白いな」

「あつ……すみません」

「怒っていない。ただの感想だ」

「すみません……」

どうしてもその口調のせいで怒っているように聞こえてしまう。それに顔も整っているので、余計に迫力があつて。

乳首に感じる視線。恥ずかしいけれど隠しては着替えができない。見られるのも仕事のうちだ、と覚悟を決めてズボンを下ろす。

「細いな」

「っ……」

一つ一つ感想を言っていきたいのだろうか。まだ下着は残っているけれど、この最後の一枚を失ったら——山城は何と言うのだろうか。

(小さいな、とか……?)

考えるだけで恥ずかしい。急かされることはないけれど、店にクレームを入れられるのは避けたくて、下着のゴムに手をかける。

(うう……)

やっぱり恥ずかしい。でも仕事。初仕事なんだから、特にちゃんとしなと。

ゆつくりと下着を下ろす。視線が乳首からソコに移った——そう分かるくらい、ねっとり絡みつくような視線を感じる。

「ストリップだな」

「っ……」

いやらしい。こんなことなら勢いよく脱いでしまえばよかった。確かにこれではまるで焦らして見せつけているみたいだ。もうペニスは露出した。見られてしまったのだからもういいやと半ば投げやりな気持ちで足から下着を抜くと、さらに視線が熱を帯びたように感じた。

「……まだ子供だな」

「っ……すみません……」

小さい、ですらなかった。むしろもつと侮辱的な言葉。なのに不快感は覚えなかった。怒りも湧かない。

「毛は処理してきたのか」

「はい……」

「剃ったのか」

「はい」

「自分で？」

「いえ、店の……スタッフに……」

思い出すだけで恥ずかしい。今日出勤するとすぐスタッフに呼ばれ、自分で膝裏を抱くようにして陰部を曝した。そして、剃り残のないよう丁寧に剃られたのだ。

「……そうか」

つるつるのソコ。でも山城が子供のようだと言ったのはそれだけではない。

「剥けてるのか」

「手ですれば……剥けます……」

見た目は真性包茎と変わらない。けれどきちんと包皮は伸ばしてあるので、手を使えば剥くことができる。ただ、余りが多いので手を離すと戻ってしまっただけだ。

「剥いてみなさい」

「……はい」

これから使う場所なのだから、きちんと洗ってあることを示しておかなくては——と自分に言い聞かせてペニス握る。

しかし、包皮を剥くのはあまり好きではない。仮性だけれど、敏感すぎて亀頭に何か触れるとつらい——しかし仕事だ、と自分に言い聞かせ、刺激しないようゆっくりと包皮を手繰り寄せると、ソファに背を預けていた山城がこちらに顔を寄せた。近い。吐息がペニスにかかりそうなくらい。

「……汗ばんでるな」

「っも、申し訳……」

緊張のせいだ。どうしても怖くて、緊張してしまつて。

「いや。お茶は風呂の後でかまわない。最初は床掃除を頼む」

そう言うと山城はまたソファに背を預けた。その様子にあれ？ と思う。先輩たちはとにかく厳しく怖い人だと言っていたけれど、まだ一度も怒られていない。

（失敗ばかりしてるのに……）

「エプロンの着け方は分かるか」

「は、はいっ」

いろんな種類があることは研修で教わつた。背中で紐をクロスさせるもの、

首に引っ掛けるようにして着るもの等。山城のものは首で引っ掛け、腰で蝶々結びにする簡単なタイプのものだった。

「……いい、いかがでしょうか」

目を瞑り、拳を握り……そうやって羞恥に耐えて背筋を伸ばす。

着るように言われたエプロンは最初に予想した通り乳首も、ペニスも丸見えの、研修室にはないタイプのものだった。

「ああ、とてもよく似合っている。平均より乳輪は小さいようだが」

「っ……申し訳——」

「怒っていない。それは個性だ」

「あ……」

（もしかして……）

口調こそ厳しいけれど、性格はそれほど怖いタイプではないのかもしれない。そう思うと、なんとかやっつけていけそうな気がした。と言っても、予約は翌朝九時まで。残り十六時間弱。怒らせないよう気を引き締めなくては。

「掃除道具はそのドアだ。納戸になっているから必要なものはそこから取るように」

「はい」

視線を追って位置の確認。そしてまた顔を戻すと、山城はテーブルの上にあったノートパソコンを膝に置いた。

（わ……）

指の動きが魔法みたいだ。仕事なのだろうと思うし、自分も床掃除をしないでと思うのに、ついその指捌きを見ていたくなってしまう。長い指が、カタカタと軽快な音楽を奏でていく。

（ダメダメッ）

首を振り、納戸に向かう。後ろからは打鍵音。もう一度振り返ってみると、山城のいる一角がまるで映画のワンシーンのように輝いて見えた。

（よし！）

山城も仕事をしているのだ。美門は美門の仕事をしなければ。それに山城が仕事に集中している今がチャンスだ。こんな恰好で掃除をする姿を見られていては、集中できるはずがない。

納戸のドアを開けて掃除道具を……しかしそこにあつたのは——。

（……え……もしかしてこれ……？）

山城は床掃除だと言っていた。だから掃除機があるのかと思いきや、そこにあつたのはバケツと雑巾だった。

（床掃除……雑巾で……？）

今の自分がそれをしているところが脳内に浮かんだ。

（っ！）

床をきれいにしようと思えば当然力の入りやすいように四つん這いになる

必要がある。けれど、今下半身を覆う物は何もない。

(恥ずかしい……)

先輩たちは何も言っていなかった。もしかしたらこれくらいのことにはよくあることで、わざわざ言葉にするまでもなかったというだけなのかもしれない。でも知っておきたかったな、と思ってしまう。

(うろう……)

ちら、と振り返り山城を見る。カタカタという音は聞こえているのでまだ仕事に集中しているのだろう……と思っていたのに、なぜか視線がぶつかった。

「できないか」

「っ……い、いえ……」

カタカタカタカタ。

山城は、画面も見ずにタイピングをしていたようだった。

雑巾がけは部屋の隅から——となると必然的にお尻を山城に向ける必要があった。感じる視線。見ているのはアナルか、陰囊か——。

(うろう……恥ずかしい……)

「風呂は十八時半。夕食はその一時間後だ」

「あ、は、はいっ！」

時間配分も大切な仕事の一つ。規定通りに職務を全うしなければならぬ。

「緊張してるな」

「っ……すみません……」

初めてで、というのとはただの言い訳だ。頭を下げ、謝ることしかできない。

「今日が初めてなんだろう。誰でも緊張する」

「あ……」

止まっていた打鍵音が再び響き始めた——ことで、声を掛ける際に手を止めてくれていたことに気が付いた。

(優しいかも……)

口調は相変わらずだけれど、気に掛けてくれていることが分かる。このエプロンは恥ずかしいけれど、この視線だって見守ってくれているものだと思えば——。

(よし！ 頑張るぞ！)

それに考えてみたらこのエプロンは山城の趣味だ。恥ずかしがっているのは失礼だ。

でもだからと言って雑な仕事にはならないよう、丹精込めて床を磨いた。

そして掃除を始めてから数十分後——。

「ミカ」

「はいっ！」



背後から聞こえた呼び声。振り向くと、すぐ近くに山城が立っていた。

「立ちなさい」

「はいっ」

何か粗相をしてしまったのだろうか。それともきれいになつていないと言われるのだろうか——不安に思いながら立ち、両腕を脇に揃える。

真剣なまなざし。その視線は美門の目ではなく、もう少し下……胸の辺りにあった。

「乳首が隠れている」

「あっ」

~~~~~

「カウパーで床を濡らしたのはミカが初めてだよ」

「っ……あ、うそっ……」

その言葉の意味が分からないほど子供ではない。焦って床を拭うけれど、それよりも汚れているのは山城の指だ。

(どうしようっ)

持っているのは雑巾だけ。エプロンは着けているけれど、これは山城のものだ。汚すわけにはいかない。

「あつ、あの、えっと」

「舐めなさい」

「あ……」

「ミカのいやらしいカウパーだ。掃除をしながら垂らしたカウパー」

繰り返される「カウパー」。一度聞けばもう十分なのに、言い聞かせるように繰り返されると、頭がその言葉を受け入れてしまう。聞きたくないのに。知りたくないのに。

「ミカ」

「っ……」

なぜかその呼び方が優しく聞こえた。まるで「してごらん？」と言われていているような。

(あ……名前……)

そう言えば、呼ぶときはいつも名前だった。源氏名だけれど、山城は一度も「おい」とか「お前」なんて言わなかった。必ず「ミカ」と呼んでくれていた。

「……ごしゅ……」

ご主人様の指を舐める。それは……嫌ではなかった。でもそこに付着しているのは自分のカウパー。

「ミカ」

その呼び声が決定打だった。差し出された右手を両手で包み、口を開けて指先に近付ける。

(ああ……)

なんてことをしようとしているのだろう。床に落ちた自分の体液を舐めるなんて。

あと数センチ。あとほんのちよつとで指先が口に——入った。

「んう……」

苦い。ほんの一滴か二滴のはずなのにとても苦く感じた。それにぬめり気があるようにも。

「う……」

まずい。気持ち悪い。でもまだ、許しが出ていない。上目遣いで山城を見る。視線は合わなかった。でも、その分唇が熱い。

(見てる……)

指を咥える口元をじつと。

「んっ……!!」

急に動いた指。指腹が美門の舌を撫でた。

「んっ……んう……」

触れているのはおそらく第一関節程度だろう。なのにまるで愛撫されているような気分。

「んう……」

山城はカウパーを落とすために念入りに擦りつけているだけだ。なのに、次第にぼうつとしていく頭は山城の指の味ばかりを追っていく。美味しくてもっと欲しくて、与えられた指先をちゅうちゅうと吸う。

「んっ……」

——ああ美味しい……と浸っていると名前を呼ばれた。

「……ミカ」

(あ……)

しまった。今はただ汚した責任を取っていただけだったのに。

「ごめんなさいっ」

ほんの些細な汚れだったのに、口から出した指先はてらと唾液で光っている。どう見ても汚れは増していた。

(どうしようっ……)

洗ってもらわなければ。でもどうしたら——歩かせてもいいのだろうか。でもご主人様だ。

メイドが汚した手を清めるのにご主人様を歩かせるなんてできない。

(分かんないっ……)

研修ではこんなこと習わなかった。きつとこんなことをしてしまうメイドなんていないからだ。起こり得ないから、教えられなかった。

「申し訳ございませんでした……」

もう、謝るしかなかった。手を床につけ、頭を下げる。

「ミカ」

上から聞こえる声は何ら変わらない。でももしかしたら声のトーンが変わらないだけで怒っているかもしれない……と思うと顔を上げることはできなくて。

「ミカ、顔を上げなさい」

「っ……はい……」

従うしかない。恐る恐る顔を上げると、山城がじつと美門を見ていた。

「私はこの程度のことです。叱つたりしない。メイドの粗相も可愛いものだ」

~~~~~

そうだ、今の内に入浴後の水分補給の準備をしておかなくては。凹むのはいつでもできるけれど、今は山城のために精一杯できることをしないとイケない。

乱雑に体を拭き、裸のままキッチンに向かった。

最初にしたのはカテーテルの挿入。それから麦茶を膀胱に入れて冷蔵庫に用意されていた刺身と醤油、ワサビを取り出す。夕食で炭水化物は摂らないと申し送りがあったので、ダイニングテーブルの上で、膝から下だけをぶら下げるようにして寝転んだ。

(大丈夫、できる……)

箸を箸置きに置いて、お腹の上に大量のツマを——体温で刺身が傷まないように——載せる。両方の乳頭を隠すようにわさびを出し、それから最後、臍に醤油を入れて山城が上がってくるのを待った。

「ミカ」

「あ、ご主人様！」

先ほどは、と謝ろうとしたとき、すぐ横に立った山城が目を細めた。

「可愛い姿になってるな」

「っ……お、好みではなかったですか……」

店を出るとき、「食事の際の盛り付けはミカが考えるんだよ」と支配人に言われた。中には長時間コースで調理までメイドに頼む人もいるらしいけれど、山城はそこまでは求めないから、と。

「いや、食べるのがもったいないくらいだ」

「あ……」

どうしよう。一気に体が熱くなった。醤油が蒸発してしまうんじゃないか、と思うくらい。

「飲み物は飲んだか」

「え？」

席に着くかと思つたのに、山城はそのまま歩いて冷蔵庫に向かってしまった。

「あ、あのっ」

「ん？」

何だろう、お風呂に入る前とまとっている空気が少し違うように思う。柔らかい。お風呂でリラクセスしたからだろうか。

「ご主人様の飲み物は用意を……」

「俺の？ どこに？」

「あ……」

そうだ、すでに体には盛りつけがされているので上体を起こすことはできない。これではまたコップに出すのに山城の手を借りなくてはならなくなつてしまった。

「……すみません」

「ん？」

パタン、と音がして冷蔵庫のドアが閉まった。しかし戻ってきた山城の手には何もない。そのことに少しだけ安堵した。

「お腹に……でもコップを用意してなくて……すみません……」

今日何度目の失敗だろうか。もう数えたくもない——教えきれないけれど。

「ああ、それなら直接いただく」

「え？」

言葉の意味を捉えるより先に啞えられた亀頭。しかも、山城は包皮を剥かなかった。剥かないまま、口内に——しかも包皮の窄まりをちろちろと舐められる。

「あつ、ああつ」

人生で初めての感触だった。

（フェラチオ……みたい……）

これはあくまで水分の要求に過ぎないのに。なのに、まるでいやらしいことをされているみたい。

——トントン。

「あつ」

指先でお腹をノックされた。早く出せ、と言われていたのだと気付き、目を閉じて排尿の感覚を思い出す。

「んん……んん……」

これは先ほど一度経験している。啞えられながらではなかったけれど、膀胱の開き方はなんとなく分かった。

「ん……」

人前での排泄なんて、そうそう経験することではない。公衆トイレならまだしも、こんなじっくりと見られながらとか、吸われながらなんて。でもその分、出したときは声が出るほど気持ちいい。

「あつ……出るっ……」

しよる、しよる……勢いよく出してはいけない、という頭はあった。だからちよるちよると少しずつ出していく。

コクン——。

（あつ……飲まれてる……）

尿ではない。そこにあるのは麦茶だ。そう分かっているのに。

（すごい……）

コクン、コクンと音が聞こえるのはきつとわざとだろう。そうやって、ちゃんと飲んでいると教えてくれているのだ。

（ああ……）

気持ちいい。自分のペニスを啞え、そこから出るものを飲んでもらえるなんて。

うっとりしていると、山城の唇が締まった。止める合図だ、と判断して排泄を止める。す

るとやはり山城は頭を上げた。そして無言のまま、美門の顔を覗き込んでくる。

「……ご主人様……んっ……！」

重なった唇。冷たい舌が唇を撫でてきた。

「あっ、んぐうっ！」

何だろうと唇を微かに開いた瞬間、舌と共に液体が口内に流れ込んできた。

(うそっ……！)

自分が出したものだ——でもそれよりも、山城にキスをされているということの方が衝撃  
だ。

「んんっ！」

伏せられた瞼。長く、きれいに揃った作り物のような睫が見える。

「んんっ……！」

コクン、と麦茶を嚥下すると、追加で少しだけ麦茶を入れられた。

——コクン、コクン。

噎せさせないようになのか、それはゆっくりとしたペースだった。一度の口付で何度も何  
度も注がれる。口が大きいんだな、なんてうっとりと考え、麦茶の中に隠された山城の味を  
探しながら嚥下した。

「ん……！」

全て飲み込むと、まるで褒めるように舌先を舐められた。そして、ゆっくりと体が離れて  
いく。

「こぼさず飲めたな」

細められた目。褒められている。

「あ……！」

唇が熱い。麦茶は冷たかったのに、まるで感覚が壊れたように熱い。

思わず指で唇を撫でると、山城が数回瞬いた。

「もしかして初めてだったか」

「え？」

何のことか分からなかった。派遣されるのは初めてだし、キスも……だからこうして口移  
しで飲み物を飲ませてもらうのも、ペニスを咥えられたことも、何もかも全て初めて。

「キス」

「あ……はい……！」

頷くと、山城はまた眉根を寄せた。

「ご主人様……？」

どうしたのだろう。もしかして面倒なことになったな、とでも思っているのだろうか。初  
めてなんて重いと。

「あの、」

「いや……すまない」

答えはもらえなかった。山城がキッチンに入り、水の流れる音が聞こえてくる。そして戻  
ってくると、濡れたタオルで何度も唇を拭かれた。

「んっ……ん、や、あの……」

なかったことにしたくなるほど嫌だったのか——そう思うと胸がツキンと痛んだ。勃起しかけていたペニスも力を失っている。

「……食事をさせてもらう」

「はい……」

さつきはあんなに胸が高鳴っていたのに、もうツキンツキンという鋭い痛みに耐えるしかなくて。

「醤油は……臍か」

「はい……あまりつけすぎると体によくないので」

山城の態度は入浴前のそれに戻ってしまっていた。少し冷たい声と話し方。寂しい。悲しい。こんなことなら嘘を吐けばよかった。慣れているとまでは言わなくても、それなりに経験はある、くらいに。

(でも嘘なんて……)

吐きたくない。もう今後二度と会えない相手だったとしても。

「わさびは乳首か」

「っ……はい」

時間が経ったせいか、そこは少しピリピリとし始めている。痛いというよりも、快感に近い程度の刺激。

「たくさん出したな」

ふ、という軽い笑い。空気が少しだけ和む。

「ん……あっ……」

箸でつままれた乳頭。見られるのが恥ずかしくてつい乳頭を隠すように盛り付けてしまったのだ。

「醤油は少ないのにな」

「っ……!!」

山城の言う通りだった。矛盾している。でも、たくさんあるからいくらでも取れるはずなのに、山城はわざと乳頭を刺激するように箸を動かした。

「あっ、あっ」

「ん？ ……これはわさびじゃないな」

分かっているだろうに……でも少し楽しそうなのが嬉しくて。

「はいっ、それはっ」

「それは？」

最初はふにふにとした感触だった乳頭は、もうピンと張りつめてしまっている。早く食べてほしい——乳首ごと食べてもらえたらいいのに、なんて。

「それはっ、あっ、乳首っ……乳首ですっ」

~~~~~

「お帰り。どうだった？」

「あ……」

店に戻ると、店長がすぐにこちらにやってきた。

「失敗した？」

「すみません……」

もしかしたらすでに山城から聞いていたのかもしれない。何も言わないだろうと思っただけけど、やはり金銭が発生していることなだからクレームが入るのは当然のことだった。

「ちゃんともらって来た？」

「え？」

「精液」

「あ……はい」

店長は慣れたものなのだろう。でも「精液をもらって来たか」なんて確認はとてもしやらしい。それに「はい」と答えることだって。

でも、今は全く興奮しない。

「よかったじゃん。じゃあ、俺が確認するから」

「え……店長がですか」

「うん。恥ずかしい？」

「や、いえ……」

相手が誰だろうと恥ずかしい。研修をしてくれた教官ならまだ馴染みがあるから気は楽だけれど。

「じゃあほら、部屋入ろう」

どうやら怒ってはいないらしい。初めてだから多少の失敗はしかたないと目を瞑ってくれたのか、それともまさか本当に山城がクレームを入れなかったのか——考えても、全く分かったらなかった。

促されて入った浴室。服を脱いでマットの上に四つん這いになってプラグを抜き、店長に向かってアナルを曝す。

「腫れてはいないみたいだけど、痛くない？」

「はい……大丈夫です」

腫れているはずがない。だって擦られてなんていないから。本当はそうしてほしかったけれど、してもらえなかった。

「よかった。じゃあ精液を出してみて」

「はい……」

上体を少しだけ起こしてアナルが流れやすいように調整する。でもなかなか精液は垂れてこない。

「んっ……」

食事を取っていないせいか、便意は全く感じなかった。それでも排便の感覚でお腹に力を入れてみる。しかし、やはり垂れてはこなかった。

「出ないね」

「なんで……」

でもくれたはずだ。だって漏斗を入れて、そこに精液を……あれ？

そういえば、射精の瞬間を見ていない。だから精液が本当に出されたのか……出されていたらとしても、本当に漏斗にくれていたのかが分からない。

(でも入れてるって言うてくれてたし……)

嘘を吐くような人ではないと思う。でも数々の失敗を考えると不安が膨らむ。

「ちよっと嗅ぐよ」

「えっ？ つあ、や、店長っ！」

スン、という音とともに、アナル付近の空気が吸われる感覚があった。

「……これじゃ分からないな。広げるけど大丈夫？」

「あ……お尻……？」

「そう。中也確認するから」

「はい……」

怒っている声には聞こえない。でもきつと、嘘を吐いていると思われているのだろうか、と思った。

(痛い……)

胸が痛い。だって嘘を吐いたつもりはなかった。山城はちゃんと精液をくれたと思っただけだ。でもまさか、入っていなかったなんて。

(あ……もしかして……)

精液は直接内部に出されたわけではない。漏斗を通してだったので、もしかしたらあの細い部分に詰まってしまったのかもしれない。それに気付かず抜かれてしまった、とか。

(でも……)

どちらにしても直接もらえなかったという時点で失敗だ。同じだ。どちらも。

「入れるよ。力抜いてて」

淡々とした声。ぬめりを帯びた冷たいものがアナルに挿し込まれた。

「っ……」

「ごめん、痛い？」

「いえ、大丈夫です……」

こんなときでも「バレたくない」と思っってしまう自分が恥ずかしい。

(最低だ……)

失敗したと報告すべきなのに。全てにおいて失敗をし、山城に手間を掛けさせ、精液だってお情けでもらっただけなんです、直接ほしいとお願ひしたけれどダメでした、と。

でも、言ったら本当にクビになる。さっきはその方がいいと思っただけで、ここをクビになったらそれこそ本当に行き場がなくなるんだな、と思うと怖かった。行き場も、帰る場所もなくなる、ということが。

(痛い……気持ち悪い……)

また始まった胸の痛みと不快感。自分の存在価値について考えるといつもこうだ。でも自分が悪いのだから、仕方ない。



ぐつとアナルが開く感触があった。少し痛い。やはり硬かったのか抵抗もあったようで、店長が動きを止めた。

「……本当に精液もらった？」

「……はい」

言わなければ。漏斗越しにもりました、と。でない、これではまるで山城のペニスがとても小さいかのようだ。そんな山城の名誉に関わる。

「……もう一回嗅ぐよ」

「あつ……」

スン、という音。恥ずかしい。アナルの臭いを嗅がれるなんて。

「……うん、ちよつと臭う」

「つ……すみませんっ……」

洗浄はしっかりしたつもりだった。でも臭いが残っていたなんて——それを直接嗅がせてしまった。

「ああ、違うよ。精液の臭い」

「あ……え？」

「うつすらだけどちゃんとする。抜いたばかりで量が少なかったのかな……」

そう言うときまたスン、という音が聞こえた。やはり恥ずかしい。でも必要な確認だった。

「うん、やつぱりするなあ。でも出てこないし……ちよつとカメラ入れるから」

~~~~~

「前列がメスメイド、後列がオスメイドだ」

「メスメイドとオスメイド……さん、ですか」

山城が奥へ進むと、メイドたちも三々五々散っていった。おそらく仕事に戻ったのだろう。

あんないやらしい格好で仕事を——美門も先日したけれど、それは山城と二人きりの空間だったから耐えられただけだ。こんなにたくさんの方がいるところで、恥ずかしいところを露出した服を着て過ごすなんてできない。

(身請けされたら……ここで……)

あの大勢のメイドの中の一人としてここで働いて過ごす……できるだろうか。恥ずかしいし、何より——。

「ミカ、この後は彼が屋敷内を案内する」

山城が紹介してくれたのは、オスメイドの中で唯一眼鏡をかけた男性だった。

「初めまして。メイド統括者の矢代といいます」

「ミカです。よろしくお願いたしますっ！」

メイド統括者……きつととても偉い人だ。心はもやもやしているけれど、そんな気持ちを悟られるわけにはいかない。

「まずはキッチンからご案内いたします」

「は、はいっ！」

思うところはいろいろあっても、今は気を引き締めてミスのないようにしなければならぬ。それでなくても仕事でミスが多いのに、ただ見て学ぶだけの時間にミスなんてしたら、それこそ目も当てられない。山城に責められたことはないけれど、矢代はきつと厳しいだろう。だってこんなたくさんメイドを統べる人なのだ。

歩き始めた矢代の背中を追う。

廊下には何人ものメイドがいた。メスマイドはみんな乳首とペニスを出させ、美門の斜め前を歩く山城を見ては、恥ずかしそうに頬を染めた。しかし山城は何も反応を返していないように見えた。きつと慣れている——いや、メイドに対して何も思っていないのだ。雇用主と従業員。山城にとってはただそれだけ。

その様子を見て、一気に心が重くなった。

(仕方ないか……)

前回初めて山城の元へ派遣されたとき、あのマンションに他のメイドはいなかった。しかしそれは、山城が美門のメイドとしての素質を確かめるつもりでそうしただけで、実際にはこれほどたくさんメイドを任せさせていた。だから当然、山城には美門に対する特別な思いはない——考えてみたら当たり前なことなのに、特別な感情を向けられていると思ってしまう。

(あ……だからあんなにきれいだったんだ……)

埃一つなかった床。きつとこのメイドたちがきれいにした後だったのだろう。

一人で浮かれてバカみたいだ、と思った。それでも身請けしてもらえるのならありがたい、求めてもらえたこと自体はとても嬉しいと思う。

(でも……)

——本当に、身請けと言われて嬉しかったのだ。山城に求めてもらえたことが嬉しかった。だから……山城がミカのことを特別視していたわけではなかったと分かり、つらい。

「こちらです」

「あ、は、はいっ！」

今は何も考えない、と自分に言い聞かせ、歩き始めた矢代の背中を追う。

矢代の身長は山城と同じくらいだろうか。とても高く、足も長い。そしてやはり、歩くのが速かった。でも山城のように——首を振る。山城とは比較しない。

大きなドアの先、広いキッチンにはいくつもの調理台が置かれていた。壁際には大きな食器棚。そして至るところにメイドたち。

最初に矢代が向かったのは、全裸のメスマイドが膝立ちをしている場所だった。その横にオスマイドが寄り添うように立っている。

(何してるんだろう……?)

「こちらは食器の洗い場スペースです」立ち止まった矢代が言った。

「え……？」

しかし、普通のシンクとは似ても似つかない。まるで簡易的な足洗い場のような形。一メートル四方、高さは十センチほどの受け皿が床に設置されているだけで、蛇口も見当たらない。

「このメスマイドは皿メイドと呼ばれ、皿洗いの担当です」

「あら……え？」

洗う、と矢代は説明したけれど、皿メイドと呼ばれたメイドは床に膝をつき、腰を突き出すようにしてペニスで……柔らかいままのペニスで皿を擦っていた。

（おちんちんで洗ってるってこと……？）

「んっ、あっ、あっ」

「喘いでいても皿はきれいになりませんよ。昨日は一枚洗い残しがありました。今日は全てきれいにしましょう」

そう言ったのは、横に立っているオスマイドだった。厳しい声。しかしペニスを見つめる目は優しい。

「あっ、ごめっ、なさっ」

泡だらけのペニス。皿メイドは嬌声を上げながら洗い物をこなしていた。

「見学させていただきますね」

矢代が声をかけた。四つの目が一斉に美門に向けられ、視線を避けるように頭を下げる。

「お邪魔します。よろしくお願いします」

身請けが決まれば、この人たちは美門の先輩になるのだ。失礼があつてはいけない——まだ身請けを受けると決めたわけではないけれど。

「どうぞごゆっくり見学なさってください。皿はもう残り二枚ですが、洗い流しもぜひ」

にこやかに応えてくれたのは、皿メイドのパートナーのオスマイドだった。ただ立っているだけで何をしているのかは分からなかったけれど、周りから聞こえてくる声から勘案すると、どうやら洗剤を出したりメイドを励ましたり……という仕事をしているようだ。

「洗い流し……？」

普通に水で流すのではないのだろうか。ペニスで洗っているのだから……という考え方は失礼だけれど、ペニスをスポンジ代わりにして食器を洗っているのだから、普通に……いや、普通より念入りに流すだろう。

（あ、おちんちんで擦りながら流すのかな？ おちんちんで洗うなんてえっち……）

他のメイド会社だからだろう。ミカの所属している店ではこのような洗い方は指導されていない。

人の性器なんてまじまじと見るのは失礼なのに——そう思っているにしても、つい見てしまう。目を離すことができない。だって皿に強く擦りつけているというのに、ペニスはずっと柔らかいままなのだ。

（気持ち良さそうな声を出してるのに……）

——もしかしたら、射精した直後なのかもしれない。だから気持ちいいけれど勃起はできない……もしそうなら、ただペニスを使って洗っているだけというよりも何倍もいやらしい。いったばかりの敏感で繊細なペニスでこしこしと擦らないといけないなんて。それも食事に使うものを。

ペニスがむずむずし始めた。このままだと勃起してしまうかもしれない。

ちらりと、視線だけで周りにいる人——山城、矢代、オスマイド二人——の股間を覗き見

る。しかし誰一人勃起はしていない。

(うう……どうしよう……)

何か他のことを考えないと、と思っていると、矢代が口を開いた。

「ここではペニスを使って食器を洗っております」

「は、はい……」

言われなくても見て分かっている。でも言われると、より一層いやらしさが増した。皿メイドも同じように思ったのか、少し体がびくりと揺れ動いたような気がした。

本当に……なんていやらしい洗い方なのだろう——聞かなければよかった。これでは本当にペニスが勃起してしまう。今着ているのは私服だけれど、股間を隠すような服ではない。

(長いシャツを着てくれればよかった……)

それにズボンももっと楽なものにすればよかった。しかし山城の元へ派遣されるのに、だらしな性格はできなかったのだ。

美門のそんな葛藤に気付いていないのか、矢代は説明を続けた。

「皿のような浅いものは柔らかい状態のペニスで、ガラスのような深さのあるものは勃起させたペニスで洗います」

「え……勃起……?」

美門のつぶやきに、矢代が頷いた。

確かに柔らかく小さな状態のペニスではガラスの底を洗うことはできないだろう。しかし——それにしても、手でも簡単に荒れてしまう洗剤をペニスに使うって大丈夫なのだろうか。ちらりと見る。皿メイドは「はあ」と熱い息を漏らしながらペニスを使い、必死に皿を洗っていた。

「あ……あの、洗っていて、勃起してしまわないんですか」

初対面で不躰な質問だっただろうか。しかし皿メイドが感じているのは明らかだというのに、ペニスはやはり一度も勃起せず、ふにふにと皿の形状に沿って形を変えているのが不思議でならなかったのだ。

「このペニスは勃起しません」

答えたのは、隣にいたオスマイドだった。

「勃起しない? ……んですか」

「はい。このメスマイドは皿洗い担当として働いているので、ペニスを勃起させる必要がありません。手術で勃起神経を切断し、勃起できない状態にあります」

~~~~~

「こちらです」

矢代が足を止めた。広い背中横から前を覗き込むようにすると——

「わ……」

全裸のメスマイドが、キャスター付きの台の上で仰向けに寝転んでいた。胸やお腹の上には色とりどりの野菜がきれいに盛り付けられている。そして勃起したペニスからは細い人參

ステイックが二本飛び出し、しなっていた。

「こちらは旦那様の昼食です」

「これが……ご飯……」

山城は普段、こんないやらしい食事をしているのか。

「お食事をされる際には、このサラダにドレッシングをかけていただくのですが――」

そこで矢代が言葉を止め、右前方に視線を向けた。つられてそちらを見ると、三人のメスマイドがM字開脚をしてペニスを強調させていた。

「あの中にドレッシングを注入します。旦那様が何味を選ばれるかは分かりませんが、最低三種類は必ず用意します」

「あの……中って、どの……」

膀胱だろうか。それともアナルだろうか。

「ペニスです。膀胱にドレッシングを入れ、排泄の要領でサラダにかけます」

ああ……と思わず熱い息が漏れた。なんていやらしい食事なのだろう。しかし山城はサラダしか食べないのだろうか。

「サラダを召し上がった後はスープや主食、主菜を召し上がります。お楽しみになりながらの食事となり時間がかかりますので、そちらは冷めてしまわないようサラダをお召し上がりになられている間に準備いたします」

「フルコースみたい……」

食べたことがないのでフルコースの定義は分からないけれど、順番に出てくるというのはフルコースのイメージだった。思わず呟いたそれに、矢代が頷く。

「デザートまでお召し上がりになると、時に二時間から三時間かかります」

「そんなに……」

ではきっと先日美門が用意した食事では物足りなかったことだろう。それなのに山城は一言も文句を言わなかった。

(やっぱり優しい……)

これだけの人数が働いているということからも、山城の人の良さが分かるような気がした。

「ご飯は直径五センチ程度の丸いおにぎりをラップで包み、それを担当者のアナルに入れた状態で運びます。冷めないよう体内で保温し、ご主人様の召し上がるペースに合わせて、産卵するようにして給仕します」

「産卵……」

思わず想像してしまった。広いダイニング。給仕係のメイドが並ぶ前で、ご飯を食べてもらうべくいきむのだ。でもいきみすぎてはいけない。おにぎりが潰れてしまわないよう、優しく、そっと……アナルの開き具合を意識しながら――。

「主菜はメニュー次第で給仕方法が異なります。スープやお飲み物等は、それぞれ担当の者がおります」

矢代の声に、意識を戻す。

「あ……それも膀胱からですか」

「はい。基本的には膀胱からペニスを通してグラスに注がれます。しかし具のあるスープや

スムーズのようなところのあるものは直腸内で作ることもございますので、その場合はアナルから器へと注がれることとなります」

(わ……)

アナルから飲み物を出すなんて……まるで下痢だ。担当者はつらくないのだろうか。気になったけれど、訊ける雰囲気ではなかった。みんなが食事を作っている場で、下痢だなんて言えない。

「——そろそろ皿洗いが終わりそうですね。行ってみましょう」

皿メイドのところに戻ると、メイドのペアが一組増えていた。シンクの横で、別のメスマイドが膝をついている。

「お疲れ様でした」

「お願いします」

メスマイド二人が場所を入れ替わった。皿メイドは立ち去るのかと思ったけれど、横にしゃがんでシンクの中を見ている。

「今から蛇口メイドが皿の泡を流します」矢代が言った。

(蛇口メイド……?)

「あの……どうやって……?」

邪魔にならないように小声で訊くと、矢代は無言のまま視線をメイドたちに向けた。

(あ……まさか……)

オスマイドが蛇口メイドの背後に膝をついた。スツと、慣れた手つきで蛇口メイドのペニスを持つ。それを確認した蛇口メイドがシンクに置かれた皿を手に取り――。

「ああっ……」

嬌声と共に、ペニスから水分が飛び出した。

~~~~~

「あの……あの方は何をなさっているんでしょうか」

「餌メイドだ」

教えてくれたのは山城だった。

「餌……?」

水槽に近付いてみると、どうやら蓋には穴が開いているらしい。全裸のメスマイドのペニスだけが水槽の中に入れられている。

(まさかおちんちんから餌を出してる……?)

でもそんなことができるだろうか。餌を出そうにも、ペニスからでは何かしらの水分と一緒にでなければ出せないだろう。

水槽の高さは美門の身長よりも高かった。少し見上げる形で、下からメスマイドの裸を見ることができる。水に浸っているのはペニスのみ。しかしそこには小さな魚が集まっていて、ペニス全体を見ることはできない。指紋一つなさそうなガラスに触れないよう気を付けて水槽の中を見ていると、矢代が説明を始めた。

「この魚はドクターフィッシュといって、人間の角質を食べる魚です。この魚の餌担当は三人いて、ローテーションでペニスに溜まった恥垢をドクターフィッシュに食べさせています」

「あ……恥垢を……ですか」

「はい。そのためその三人はペニスを洗うことは許されません。担当日でない二日間は、排泄のときもお風呂のときも、ペニスには一切触れることなく、恥垢を溜めるのです」

「う……」

ここに来てから、いやらしいものをたくさん見た。でも今の説明が一番いやらしい。だって魚だ。相手が人間ですらない。ついペニスを魚に突かれる様子を想像してしまい、そこに血が集まり始めた。

「ペニスの管理は全てペアのオスメイドが行なっています。排泄も全て申告制で、その度にペニスに装着した完全封鎖型の貞操帯を外されることになっています」

「完全封鎖型……」

「はい。通常の貞操帯であれば封鎖型であっても排尿のための穴が開いている場合が多いのですが、彼らの場合はより多くの恥垢を溜めるため、空気が通らないタイプの貞操帯をする決まりになっています」

「じゃあ勃起も……？」

「封鎖型といっても勃起を抑制する機能はありません。あくまでペニスのカバーですので勃起は可能です。ただ……勃起をしても触れることはできませんが」

勃起は許されるのに触れることは許されない……まるで生殺しだ。排泄もお風呂でも触れない——自分の体なのに。いやらしい。

「あの……じゃあ射精は……？」

「水槽の水が汚れてしまうので、仕事が始まる前にオスメイドによってミルキングされ、精液は全て搾り取られることになります」

「全て……搾り取られる……」

精液を「搾る」という言い方にぞくぞくした。気持ちよく射精するために作られた精液を搾り取られてしまう——。

想像したら、胸がきゅうつとなった。餌メイドは水槽の上にいる間、いったいどれほど苦しい思いをするのだろう。

「ずっと……ああして恥垢を食べさせ続けるんですか」

見たところ水槽の中には数百匹のドクターフィッシュがいる。魚の食事は分からないけれど、これほどたくさんいたらそう簡単に餌やりは終わらないような気がした。

「はい。もちろん餌メイドにも食事や排泄がありますから、日に数回あの台から降りることはあります。しかしそれ以外は常に水槽の上で、ペニスに溜まった恥垢をドクターフィッシュに食べさせ続けるのです」

「でも寝るのは——」

「担当の日はこのまま寝ることになります」

「え……」

「落ちないようにベルトで体を固定しますので危険はありません」

「いや……その……」

ペニスに魚にさらしたまま寝るなんてできるのだろうか。ピラニアではないのだからペニスが食べられるという恐れはないだろうけれど、生き物にペニスを預けたままというのはひどく恐ろしいことのように思えた。

戸惑っていると、矢代が説明を続けた。

「こちらのホールはお客様がいらっしやっただけにお茶を飲んでいただくためのスペースです。ですので、あの魚の餌担当は飼育件観賞用のメイドです」

「観賞用……」

~~~~~

「そろそろ産めるか」

「はい……」

のそりと起き上がり、もう一度アナルを山城に向ける。すると、微かに山城の吐息が陰囊に触れたような気がした。

「ああ……」

すぐ近くから恥ずかしい部分を見られている。そう思うと興奮がどんどん高まってしまう。

「中で潰れてしまっていないか」

「っ！ だ、だ、大丈夫だと思います……」

しかしあまり自信はない。アナルでもペニスを入れてもらえばその太さや硬さが分かるけれど、それより小さなものでは細かいことまでは分からない。

「確認しよう」

「え？ っ、あ！」

山城の指がアナルに入った。いつでも性欲処理として使っていたようにアナルはしつかりとほぐしてあるので痛みはない——しかし突然の刺激に、アナルに力が入ってしまった。

「……これか」

「あっ」

卵が山城の指に突かれたのが分かった。山城が体内で卵を弾くように指先を上下に動かす。

「ああっ！」

大きな卵——どうやら割れてはいなかったらしい——が直腸内で動き、お腹の膨満感を覚える。目を閉じて深呼吸を繰り返し、力を抜く。

「ふ……」

山城の指で押され、卵が奥に入ってきた。やはり苦しい。ゆっくりと息を吐きながら、いきんで卵を外に向かわせる。

「ん……ふ……んっ……」

「下りてきたな」

「んっ、はいっ……ふ……」



卵を潰さないようゆっくりと力を入れていく。このまま出したい。しかしまだ挿入されたままの山城の指が産卵の邪魔をしている。

「ああ……ご主人様……指をつ！……もう、産まれますっ」

早く早く早く出したい。つるつと、山城の食べる卵を産んでしまいたい。

しかし山城は指を抜いてはくれなかった。むしろ指の動きを激しくさせる。

「あああ！ いけませんっ！ 卵がつっ！」

体内で卵が割れたような感覚があった。殻は剥いてあるので痛みはないけれど、せつかく潰れないようにそっと入れた卵が――。

「割れてしまったな。締めすぎなんじゃないか」

「あ……」

違う。今のは山城が潰したのだ。もちろん山城もそれは分かっているはず。だからこそ責めるような声色ではないし、むしろどこか嬉しそうにも聞こえる。

(何かしたいことがある――?)

体内の卵を潰されたのはこれが初めてだ。だから何がしたいのかは分からないけれど、山城の音が明るくなるのは、楽しいことを思いついたときが多い。

「これではここから直接食べるしかないな」

「え……?」

「マヨネーズを」

「は、はいっ」

先ほど野菜スティックに使ったマヨネーズの蓋を開けて山城に渡す。

「どうぞ」

山城は無言のままそれを受け取ると、ほぐれたアナルにチューブの先を入れた。

「あああああっ！」

まだ中身がたくさん残ったマヨネーズが――。

「ああん！」

ぐじゅっ！ つとマヨネーズがアナルに入ってくる。ぬるぬるドロドロ。ローションとは

また違ったその感覚に、アナルがヒクヒクと動く。

「卵サラダだ。しっかり混ぜなさい」

「あつ……は、はいっ……」

卵サラダ――つまりそれを体内で作れということか。ここには塩コショウもパセリもない。キッチンに取りに行った方がいいのだろうか――しかしマヨネーズが多すぎて、立ち上がったら体温で溶けたそれがこぼれ落ちてしまいそうだ。

「ご、ご主人様……味付けは……」

「マヨネーズだけでかまわない」

これはプレイだ。体型の維持を意識している山城がこんなにたくさんマヨネーズをただ食べたくて使っているとは思えない。辱めたいのだ。もしかしたらこのままいやらしい行為に繋がっていくかもしれない。

「自分の指で混ぜなさい」

「はいっ……」

後ろ手でアナルに指を入れる。ぐりぐりと混ぜると、いやらしい音が聞こえてきた。

(ああ……)

なんてことをしているのだろう。直腸内でマヨネーズと卵をかき混ぜるなんて。しかし指では届く範囲が限られてしまい、全体を混ぜることはできなかった。

「ご主人様……奥まで届きません」

「下ろせばいいだろう」

「あ……」

無意識のうちに甘えてしまっていた。届かないから山城にしてほしいと、そう言外におねだりしてしまっていた。

「申し訳ありません……」

謝罪し、アナルに指を入れたまま軽くいきむ。卵の塊を少しだけ下ろし、指にしっかりと触れたところでいきむのをやめる。

「はあっ……」

しかし混ぜていると、指先に触れた卵がまた奥に入ってしまった。思った以上に白身が堅く、なかなか潰れない。これでは終わらない。早く食べてもらわないと、山城が仕事を始められなくなってしまうのに。

もう一度、今度は先ほどよりも少し強くいきんだ。そして下りてきたところで、出てしまわない程度にいきみ続けながら指を動かす。

「はあっ！ くうっ……んっ」

ようやく卵が潰れた。混ぜるのが一気に楽になる。しかし刺激が強すぎた。山城にされるならまだしも、自分一人ではないようなことではない。しかしこれは仕事だから——恋人同士だから仕事というよりはプレイの延長なのだけれど、山城はお小遣いだと言ったたくさんのお金をくれるから、やはり給料という意識は消えない。

「はあ、んっ……んんっ」

いきみ続けながら懸命に指を動かす。もう卵はぐちゃぐちゃだった。しかし山城は止めない。内部が見えないから状況を把握できていないのだろうか。それとも単に美門の痴態を見て楽しんでいるのだろうか。

「あああっ！」

もういいだろう。もう十分混ぜたはずだ。ドロドロになりすぎて指の隙間から漏れてしまいうまくない。

「ご主人様……できました」

「しつかり混ぜったか」

「はいっ……ご主人様、お召し上がりください」

10万8千字です。  
よろしくお願いいたします！

出張メイドサービス サンプル

gooneone (ごーわんわん)

2021/5/3

メール: gooneonegooneone@gmail.com

pixiv: 19591291

Twitter: @gooneone11

LINE: @gooneone

